

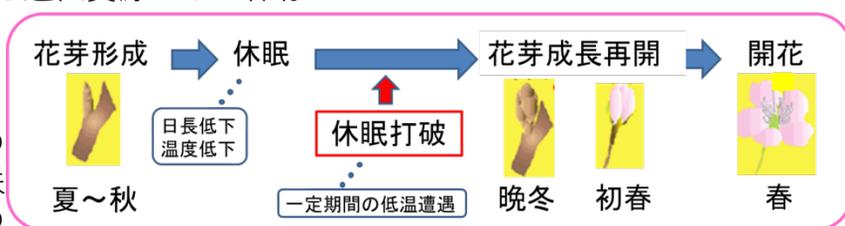
サクラを「いつでも」「どこでも」咲かせる技術開発

生物資源科学部 准教授 田中 秀幸

サクラは日本人にとって最も親しみのある花の一つです。近年では、切り花としても人気があり、特に年末年始の贈答用としての需要が高まっています。しかし、早期開花に関する研究は数品種でのみ行われているだけで、多くの品種では未確立です。

サクラの花芽は夏に作られ始めます。そして、秋になり日長や気温が低下することで、花芽は成長を止めて休眠に入ります。この休眠は、冬の低温に一定期間遭遇することで打破され、花芽の成長が再開して春に開花します。サクラの品種ごとに休眠打破に必要な低温時間を把握することが出来れば、どの品種においても早期開花が可能となります。島根大学生物資源科学部附属生物資源教育研究センター・本庄総合農場では、約160品種のサクラを遺伝資源として保存・

管理しています。これら豊富なサクラ遺伝資源を活用して、サクラの開花メカニズムを解明し、どのような状況でもサクラを咲かせることができる技術の開発に取り組んでいます。



サクラの開花メカニズム



島根大学本庄総合農場が保有するサクラ



低温処理により12月に開花したサクラ
左：‘関山’ 中央：‘一葉’ 右：‘御衣黄’